

平成 23 年度 文部科学省
「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」
委託費による「イスラーム地域研究」にかかわる共同研究
東京大学イスラーム地域研究 (TIAS) 公募研究

近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究

研究成果報告書

(研究代表者：澤田 稔)



2013 年 3 月

目次

はしがき	3
I. 研究会活動	
1. 第1回研究会	4
2. 第2回研究会	18
3. 第3回研究会	19
4. 第4回研究会	20
II. 海外調査	
1. タジキスタン共和国山岳バダフシャーン自治区	
(1) 実地調査行程記	21
(2) 聖地と関連施設	23
2. クルグズ共和国	
(1) 実地調査行程記	43
(2) 墓廟とマザール	48

はしがき

本公募研究「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」は平成23・24年度の2年間にわたり、タジキスタンとクルグズスタンのムスリム住民を主たる対象として宗教生活に深くかかわる文書や施設に関する資料を調査研究した。それと並行して国内では4回の研究会（うち1回は国際会議）を開催して海外調査の成果を紹介するとともに中央アジア山岳高原部について歴史学・民族学等の成果の共有化を図った。本研究報告書はこれらの活動成果を国内での研究会と海外での実地調査に分けて取りまとめたものである。とくに、実地調査については宗教施設に関してより詳しく成果を記している。

本公募研究の研究構成員は澤田稔（富山大学人文学部）、稲葉穰（京都大学人文科学研究所）、宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター）の3名である。タジキスタン共和国における実地調査にあたり同国山岳バダフシャーン自治州ハールグ市在住のウミード・ママドシェールザードシャーエフ氏 Umed Mamadsherzodshoev 氏 (University of Central Asia, Khorog, Tajikistan) に多大の援助をたまわった。またクルグズ共和国における実地調査にあたり秋山徹氏（日本学術振興会特別研究員）の協力を受けた。そして河原弥生氏（イスラーム地域研究東京大学拠点研究員）からバダフシャーン資料の収集と整理に尽力を得た。また国内の研究会においてペドラム・ホスロネジャド氏 Pedram Khosronejad (Department of Social Anthropology, University of St. Andrews, Scotland) からイラン西南部の山岳高原の遊牧民に関する講演を守川知子（北海道大学文学部）の講師紹介とともにうかがった。ステファン・デュドワニョン氏 Stéphane A. Dudoignon (CNRS, Paris) はバダフシャーン文書の研究に対する確かな助言をくださった。海外調査とりわけタジキスタンにおいては、調査先の住民に資料の閲覧のみならず客人としてのもてなしも受けた。研究会に参加され討議に加わっていただいた方々を含め、本公募研究の遂行に援助下さったすべての方々にお礼申し上げる。

研究代表者 澤田 稔

I. 研究会活動

1. 第1回研究会

2011年6月4日、東京大学本郷キャンパス法文1号館217教室において第1回の研究会を公開形式で開催した。参加者は報告者3名を含めて10名であった。本公募研究は今年度より新規にスタートするので、研究計画の趣旨説明と研究構成員3名の各専門分野に関する研究報告をおこない、研究会を立ち上げた。

まず澤田稔が「プロジェクトの趣旨説明」をおこない、(1)東西トルキスタンの中間地点、(2)オアシス平原部の源流域、(3)現在における分断状況、の3視点から中央アジア山岳高原部について地域研究をすすめる必要性を提起した。その上で、(1)山岳高原部から四通八達する交通路や生活域の歴史地理学的把握、(2)クルグズ人やパミール諸民族など住民における宗教文化の形成過程と現状の調査究明、(3)近現代史の解明、という3つの具体的アプローチにより研究をすすめる方針を述べた。

続いて宇山智彦が「ロシア語文献から見るパミール近代史：研究の歴史と論点」と題して研究報告した。宇山氏は(1)ロシアによるタジキスタンの征服・併合の経緯、(2)タジキスタン(特にパミール)に関する探検・調査・研究の歴史、(3)いくつかの論点(イスマーイール派。グレートゲームのなかでのパミール)、(4)資料収集・調査に関わる今後の課題、の4点について概観をおこない、共同研究を進める上での知識の共有をはかった。【後掲の報告レジュメを参照】

3番目に稲葉穰が「行歴僧のルートとパミール高原」の題で精緻な史料考証の成果を報告した。稲葉氏は8世紀半ばに入竺した悟空の往路上の地名を同定し、4世紀末から8世紀までの仏教僧侶がたどったルートを5つに整理した上で、アラブ・イスラーム軍が西から進出してくる状況下でのバダフシャーやパミール等の山岳高原部における政治軍事状況を細やかに検討した。前近代における旅行者の行程を現地名と対照しながら同定していく研究作業は、本プロジェクトの歴史地理学的アプローチに大きく貢献するものである。【後掲の報告要旨と地図を参照】

最後に澤田稔が「山岳バダフシャー自治州西南部のムスリム聖地と関連施設」について、2009年に調査した成果を関連文献の記述をまじえながら紹介し、近年おこなわれている聖地保護と博物館建設の意味づけを試みた。

宇山智彦「ロシア語文献から見るパミール近代史：研究の歴史と論点」

本報告のねらい：共同研究を進めるうえでの知識の共有

報告者の関心：ロシア・ソ連の学知と中央アジア進出・統治の関係。「グレート・ゲーム」。

タジキスタンの地方史と、その中でのパミールの独自性・多様性

1. ロシアによるタジキスタン征服・併合の経緯

1866～70年、ロシアがコーカンド領フジャンド、ブハラ領ウラテッパを征服、北部の残りの地域も76年までに征服

南部には事実上独立したベク政権がいくつも存在していたが、ロシアの保護国となったブハラが、1869年にヒサルとクラブ、77年にカラテギン、78年にダルヴァズを併合（なお、ダルヴァズは山岳バダフシャン自治州の一部だがパミール諸民族ではなく〔狭義の〕タジク人の地域であり、東隣のヴァンジも19世紀にタジク化していることに注意）

パミール高原のシュグナンとルシヤンは英露間の交渉ののち1896年にブハラに併合（後述）、ただし1905年からロシアの実質的な支配下に。東部の人口希薄なクルグズ人地域（1876年のコーカンド・ハン国の滅亡後帰属があいまい）は1895年ロシア領に

2. タジキスタン（特にパミール）に関する探検・調査・研究の歴史

ルビーなどの鉱物に対する古くからの関心（ピョートル大帝期など）

現地調査・探検はイギリス人が先行（インド人も参加）

軍人地理学者・旅行家ヴェニウコフの本（Veniukov 1861）：実地調査ではなく文献をもとにしたもの

1870年代以降、主に地理・自然を調査（軍事目的＋山地への関心）、付随的に民族学・歴史も調査：

1871 生物学者フェドチェンコ A. P. Fedchenko、パミール北端のザアライ山脈到達

1876 軍人コステンコ L. F. Kostenko、生物学者オシャニン V. F. Oshanin らのパミール北部調査

（コーカンド・ハン国併合で接近が容易になったことが背景）

1877-78 動物学者セヴェルツォフ N. A. Severtsov らのフェルガナ・パミール調査（ロシア地理学協会）

1883 軍人プチャータ D. V. Putiata らのパミール調査

シュグナンとワハンがロシアの保護求めているとの情報得るが、アフガンを刺激しワハン侵攻招く

1884-87 地理学者グルム＝グルジマイロ G. E. Grum-Grzhimailo、パミール、カラテギン、クラブ等調査

1888-90 軍人グロムチェフスキー B. L. Grombchevskii、パミール、ヒンドウークシュ

など調査

特別な政治的任務あったわけではないが、アフガニスタン、イギリス、清朝の警戒招く

フンザの君主は彼を通してロシアへの臣従申し出るが、ロシアは答えず、イギリスがフンザ征服

その後、政治・軍事的色彩は薄れるがパミールと山地タジク人（ダルヴァズ、カラテギン）の調査続く

1911年の地震を受けての地質調査

セミョーノフ A. A. Semenov は宗教・民族学・言語の幅広い研究

軍医シショフのモノグラフ「タジク人」(Shishov 1910)

ソ連時代初期の調査・研究：

タジキスタンおよびイラン系諸民族研究協会 (Shagalov 1966)

1925年タシケントに設立、同年に氷河調査と民族学（工芸など）調査

理事5人は全員ロシア系（セミョーノフ、Khuf 渓谷住民の調査で有名なアンドレエフら）

ウズベク共和国啓蒙人民委員部タジク学術委員会、調査隊に必ず現地民入れるよう要請

会員たちはタシケントの中央アジア大学で教鞭。ドゥシャンベには大学がなく移転できない

ドゥシャンベ、サマルカンド、ブハラ、ホログに支部開設

名誉会員バルトリド。25年の協会論集『タジキスタン』に「タジク人：歴史概説」執筆

27年、論集『バルトリドへ V. V. Bartol'du』刊行（内容は中央アジア研究全般にわたる）

28年、論集『タジキスタン』第2巻が準備されたが、専門的すぎるとして共産党により発行停止

30年、タジク国立学術研究所に吸収

地理、地質、生物などの総合的調査隊を組織

1923 ロシア地理学協会のパミール調査隊

1928 ソ連・ドイツ合同タジク・パミール調査隊

その後ソ連のみの調査隊に受け継がれ30年代半ばまで続く。関係者の多くは大粛清の犠牲に

イデオロギーと研究の関係の一例：ギンズブルグの山地タジク人の形質人類学研究書 (Ginzburg 1937) の序文を書いたモスクワ大学教授、同書のデータが、タジキスタンに金髪で明るい色の目をしたアリア人の子孫がいるという（ドイツ）ファシストの

伝説を打ち砕いた、と評価

ソ連時代後期以降の歴史研究

ロシアの中央アジア進出史の研究の中でパミールを取り上げる (Khalfin 1965, 1975)
Strany i narody Vostoka シリーズでのパミール特集 (主に地理・民族学。Zelinskii 1975)
タジキスタンの地方史研究の中でパミールについても一定の研究 (Iskandarov 1983)
cf. 他の地域について : Kisliakov 1954; Iusupov 1975, 1986
タジキスタン独立後、山岳バダフシャン通史 (Niyozmamadov 2005) の刊行
タジク語によるダルヴァズ史 (Pirumshoev 2008) も
グレートゲームと地理学という視点からのモスクワの地理学史家ポースニコフの研究
(Postnikov 2001)
モスクワの民族学者カランドロフの総合的なシュグナン研究 (Kalandarov 2004)

3. いくつかの論点

(1) イスマーイール派

パミールにはナースイリ・フスラウらの布教で 11 世紀頃にイスマーイール派信仰が定着
(Bertel's 1959)

しかし支配者は多くの場合スンナ派 (バダフシャン、アフガニスタンなどへの従属のため?)

ただし宗派帰属に関する記録は混乱。シュグナンでは、イランからイスマーイール派
宣教のために来た者たちが建てた王朝が 1581 年から 1883 年まで続いたとされるが、
最後のユースフ・アリー・ハーン (ヤークーブ・ベグと姻戚関係) を含む多くの君主
はスンナ派 (Iskandarov 1983; Niyozmamadov 2005; Seiid-Khaidar-Sho 1916)

イスマーイール派信仰を守る 2 つの戦略 :

スンナ派か 12 イマーム派のふりをする (Bobrinskoi 1902)

宗教指導者の影響力を高める (特に 19 世紀後半のサイイド・ファッルーフ・シャー)
サイイド・ファッルーフ・シャーの子サイイド・ユースフ・アリー・シャー (Khariukov
1995)

ダルヴァズ、ヤルカンド、オシュにも弟子

ブハラ・アミール国への抵抗 (後述) 率いる。1922 年に反ソ活動の疑いで逮捕

(1930 年代までパミールのイスマーイール派はアガ・ハーンにザカート送っていたと
いう)

のち、彼の家族は弾圧され単純労働者にされる¹

¹ サイイド・ファッルーフ・シャーの孫でイスマーイール派指導者の Shāh-i Kalān (1920 年生まれ) から報告者が聞いた話 (Porshinew, 2006 年 9 月 6 日)。

(2) グレートゲームの中でのパミール

英露は 1873 年に、アフガニスタンの北部国境をパンジ川とすることで合意

しかしアフガニスタンは同年、同川両岸にまたがるシュグナンから税を取り始め、83 年には軍駐留

←サイド・ファッルフ・シャーらがユースフ・アリー・ハーンを退位させるため
要請

ロシアはイギリスを通じてアフガニスタンに撤退求めるが実現せず、英露は放置

やがてサイド・ファッルフ・シャーらシュグナン人自身がアフガン軍の駐留長期化に苦しみ反乱

→ロシアに臣従を申請、ロシアはシュグナンに軍送る

英露は 1895 年にパミールでのアフガン国境を最終画定

ロシアはブハラにパンジ川左岸放棄させる代わりに、シュグナンとルシヤンの右岸地域を与えた

シュグナンとルシヤンの人々はこれを不満とし、1905 年に事実上のロシアへの併合を実現（主体的行動）

パミール東部の人口稀薄なクルグズ人地域は周辺諸国からの介入に対しより脆弱

1860 年代にコーカンド・ハン国の支配下で一定の安定を享受

ヤークーブ・ベグ政権、清朝、アフガニスタンの相次ぐ侵攻を受け荒廃

最終的に 1895 年の英露協定に基づきロシアの支配を抵抗なく受け入れる

(パミール周辺の人々がアフガニスタン、ブハラ、イギリスの支配よりロシアの保護を望んだという話はよく出てくるが、当時ロシアについてどの程度／どのような情報を持っていたのか?)

(3) その他：ソ連期のタジク自治共和国建設と共和国昇格におけるショーテムル Shirinshoh Shohtemur (Alamshoev 2009) らパミール出身者の役割

4. 資料収集・調査に関わる今後の課題

スラブ研所蔵マイクロやトルキスタン集成などをさらに精査

日本で入手できない文献をモスクワなどの図書館で収集

文書館での調査：ロシア国立軍事史文書館 (RGVIA)、ロシア帝国外交文書館 (AVPRI)、ウズベキスタン国立中央文書館 (TsGA RUz)、山岳バダフシャン自治州国立文書館 (GA GBAO)、ロシア地理学協会文書館 (ARGO) —現在の報告者の状況では困難

イギリス人など西欧人によるパミール調査や、ペルシア語史料との突き合わせ（共同作業）

参考文献（報告で直接言及しなかったものも含む）：

- Alamshoev, Q. (2009) *Shirinshoh Shohtemur*. Dushanbe.
- Becker, Seymour (2004) *Russia's Protectorates in Central Asia: Bukhara and Khiva, 1865–1924*. London.
- Bartol'd, V. V. (1965) “Badakhshan,” in V. V. Bartol'd, *Sochineniia*, vol. 3. Moscow, 343–347.
(元は *Encyclopaedia of Islam* の項目)
- Bertel's, A. E. (1959) *Nasir-i Khosrov i ismailizm*. Moscow.
- Bertel's, A., and M. Bakoev (1967) *Alfavitnyi katalog rukopisei, obnaruzhennykh v Gorno-Badakhshanskoi Avtonomnoi Oblasti ekspeditsiei 1959–1963 gg.* Moscow.
- Bliss, Frank (2006) *Social and Economic Change in the Pamirs (Gorno-Badakhshan, Tajikistan)*. London.
- Bobrinskoi, A. A. (1902) *Sekta Ismail'ia v russkikh i bukharskikh predelakh Srednei Azii: geograficheskoe rasprostranenie i organizatsiia*. Moscow.
- Bokiev O. B. (1994) *Zavoevanie i prisoedinenie Severnogo Tadzhikistana, Pamira i Gornogo Badakhshana k Rossii*. Dushanbe.
- Dubovitskii, V. V. (2006) *Deiatel'nost' Turkestanskogo otdela Russkogo Geograficheskogo Obshchestva po izucheniiu territorii Tadzhikistana (1897–1917 gg.)*. Dushanbe.
- El'chibekov, K. (1984) “Genealogiia shugnanskikh pravitelei XVIII–XIX vv.,” *Pamirovedenie*, vyp. 1, pp. 55–60.
- Ginzburg, V. V. (1937) *Gornye tadjhiki: materialy po antropologii tadjhikov Karategina i Darvaza*. Moscow.
- Grombchevskii, B. L. (1891) *Nashi interesy na Pamire*. Novyi Margelan.
<<http://militera.lib.ru/research/grombchevsky/01.html>>
- Iskandarov, B. I. (1983) *Sotsial'no-ekonomicheskie i politicheskie aspekty istorii pamirskikh kniazhestv*. Dushanbe.
- Iskandarov, B. I., ed. (1990) *Tadzhikistan v trudakh dorevoliutsionnykh russkikh issledovatelei (vtoraia polovina XIX – nachalo XX v.)*. Dushanbe.
- Iusupov, Sh. (1975) *Vakhshskaia dolina nakanune ustanovleniia Sovetskoi vlasti*. Dushanbe.
- Iusupov, Sh. (1986) *Ocherki istorii Kabadianskogo bekstva v kontse XIX – nachale XX v.* Dushanbe.
- Ivanov, D. L. (1885a) “Chto nazyvat' Pamirom?” *Izvestiia Imperatorskogo Russkogo geograficheskogo obshchestva*, vol. 21, vyp. 2, pp. 131–145.
- Ivanov, D. (1885b) “Shugnan: Afganistanskie ocherki,” *Vestnik Evropy*, no. 3, pp. 612–658; no. 4, pp. 48–97.
- Kalandarov, T. S. (2004) *Shugnantsy: istoriko-etnograficheskoe issledovanie*. Moscow.
- Kasymov, N. (1984) “Epigraficheskie pamiatniki Pamira,” *Pamirovedenie*, vyp. 1, pp. 10–28.
- Khalfin, N. A. (1965) *Prisoedinenie Srednei Azii k Rossii (60–90-e gody XIX v.)*. Moscow.
- Khalfin, N. A. (1975) *Rossii i Bukharskii emirat na Zapadnom Pamire*. Moscow.
- Khariukov, L. N. (1995) *Anglo-russkoe sopernichestvo v Tsentral'noi Azii i ismailism*. Moscow.
- Kisliakov, N. A. (1954) *Ocherki po istorii Karategina*, 2nd ed. Stalinabad.
- Maanaev, E. J., and B. M. Jumabaev (2009) *Pamir kirgizdari: tarikhiiy-etnografialik ocherk*. Bishkek.
- Mukhiddinov, I. (1984) *Osobennosti traditsionnogo zemledel'cheskogo khoziaistva*

- pripamirskikh narodnostei v XIX – nachale XX veka*. Dushanbe.
- Niyozmamadov, A., ed. (2005) *Istoriia Gorno-Badakhshanskoi avtonomnoi oblasti*, vol. 1. Dushanbe.
- Pirumshoev, Kh. (1998a) “Darvazskoe shakhstvo do prisoedineniia k Bukharskomu emiratu (v russkoi istoriografii),” in R. M. Masov, ed., *Rossiia v istoricheskikh sud'bakh tadzhikskogo naroda*. Dushanbe, pp. 43–55.
- Pirumshoev, Kh. (1998b) “Gornyi Badakhshan i russkii Pamirskii pogranichnyi otriad v kontse XIX – nachale XX vekov,” in R. M. Masov, ed., *Rossiia v istoricheskikh sud'bakh tadzhikskogo naroda*. Dushanbe, pp. 110–126.
- Postnikov, A. V. (2001) *Skhvatka na «Kryshe Mira»: Politiki, razvedchiki i geografy v bor'be za Pamir v XIX veke*. Moscow.
- Putiata D. V. (1884) “Ocherk ekspeditsii G.-Sh. Kapitana Putiata v Pamir, Sarykol, Vakhan i Shugnan 1883 g.,” *Sbornik geograficheskikh, topograficheskikh i statisticheskikh materialov po Azii*, vyp. 10, pp. 1–88.
- Seiid-Khaidar-Sho (1916) *Istoriia Shugnana (Tarikh-i Shugnan)*, trans. A. A. Semenov. Tashkent. <<http://www.vostlit.info/Texts/rus12/Sugnan/text.phtml?id=1467>>
- Shagalov, E. S. (1966) *Pervoe nauchnoe obshchestvo Tadzhikistana: Obshchestvo dlia izucheniia Tadzhikistana i iranskikh narodnostei za ego predelami*. Dushanbe.
- Shishov, A. (1910) *Tadzhiki: etnograficheskoe i antropologicheskoe issledovanie*, chast' 1, *Etnografiia*. Tashkent.
- Shokhumorov, A. (1997) *Pamir—strana ariev*. Dushanbe.
- Tageev, B. L. (1897) “Pamirskie kirgizy,” *Niva*, no. 38. <<http://zerrspiegel.orientphil.uni-halle.de/t1056.html>>
- Uyama, Tomohiko (2010) “The Roles of Small Regions in Intercultural Relations and Conflicts: The Bökey Horde, Gorno-Badakhshan and Abkhazia,” in Anita Sengupta and Suchandana Chatterjee, eds., *Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives*. Delhi, pp. 64–77.
- Vannovskii (1894) “Iz vlechenie iz otcheta General'nogo Shtaba kapitana Vannovskogo o rekognostsirovke v Rushan i Darvaz 1893 g.,” *Sbornik geograficheskikh, topograficheskikh i statisticheskikh materialov po Azii*, vyp. 56, pp. 73–125.
- Veniukov, M. (1861) *O Pamire i verkhov'iax Amu-Dar'i*. n.p.
- Zelinskii, A. N., ed. (1975) *Strany i narody Vostoka*, vyp. 16, *Pamir*. Moscow.

稲葉穰「行歴僧のルートとパミール高原」

現在のタジキスタン共和国、ゴルノ・バダフシャン自治州の中央部に位置するいわゆるパミール高原は、古くから東西トルキスタンを隔てる自然の障壁であった。しかしもちろん人間は様々な目的でこの地域を踏破し、東へ西へと交流してきた。険しい山岳地形と深い谷に特徴付けられるこの地域を東西に抜ける道は、自然環境のゆえにある程度限られ、それゆえ歴史的な記録と現代の状況を比較的直接的に對比することが可能となる（地図1参照）。前近代においてこの地域を越える道筋について最も組織的な記録を残したのは、中国からインドへ経典を求めて赴いた仏教僧達であった。そこで彼らの記録から読み取れるルートをできる限り明らかにし、同時にそのような旅程が当時の歴史状況といかに関係していたのかを以下考えてみたい。

1. 中国からの渡印僧のルート（地図2参照）

記録に残る中で最も古くに中国からインドを目指したのは、4世紀末の法顕であった。彼は399年に中国を発ち、コータンからタシュクルガンに入り、そこから南へ向かってカラコルム山脈の西端を越え、インダス川上流域へと出た。法顕に遅れること数年で智猛も同様のルートを取り、さらに420年には曇無竭もまたほぼ同じルートで北西インドへと抜けている。5世紀初めに用いられたこのルートを仮にカラコルム西脈ルートと呼んでおこう（桑山 1990: 60-62）。

それから一世紀後の519年、北魏の使節宋雲は当時トハリスターン（アフガニスタン北部）から北西インドをおさえていたエフタルへの外交使節として派遣された。法顕らと異なり彼はタシュクルガンから西に向かってパミールを越え、一旦トハリスターンへと出た後、今度はヒンドークシュ山脈を中央部で越えてガンダーラへと南下した。パミール高原越えとヒンドークシュ中央部越えを組み合わせたこのルートをパミール・ルートAと呼ぶ（桑山 1990; 桑山編 1992）。

さらに一世紀あまり後、有名な玄奘三蔵がインドへ赴いた。往路彼はタラス、タシュケントを経由してソグディアナに南下し、さらにトハリスターンからバーミヤーンを経由してヒンドークシュ山脈西端を越え、ガンダーラへと向かった。このルートをソグディアナ・ルートと呼ぼう。玄奘は帰路、今度はヒンドークシュ山脈中央部に近いハク峠を越えて山脈北側に出て、そこからバダフシャーンを経由してパミール高原を越え、タシュクルガンへと抜けた。トハリスターン、バダフシャーンとパミール高原を結ぶこのルートを、パミール・ルートBと呼ぶ。玄奘から一世紀ほど後720年代に新羅出身の僧慧超がインドからの帰路通ったのもほぼ同じルートであった（桑山 1987; 桑山編 1992）。

もう一つ付け加えるなら、仏教僧達の利用の記録はないものの、カシュガルから西に向かい、ナリン溪谷を越えるか、あるいはイルケシュタム、オシュを越えてフェルガーナ盆

地に入り、そこからソグディアナ、あるいはバクトリア北部に出てトハリスターンに南下するルートも古くから軍事や交易ルートとして用いられていた (Stein 1933)。

8世紀半ばに至るまで、我々が文献記録から読み取れる中央アジアから南アジアへのルートはおおよそ以上の五つに大別できそうである。

2. 悟空の入竺経路

(1) 張韜光使節団の経路

上に8世紀半ばと時代を区切ったのは、我々が持っている同種の記録の最後がこの時期のものだからである。すなわち、751年に罽賓国 (ここでは現在のカーブル) への返礼使として派遣された宦官張韜光に同行した使節団の一員、車奉朝が753年にガンダーラに到達し、そのままカシミール、ガンダーラに留まって受戒して仏教僧となり、790年代に長安に戻った経緯が漢訳経典「仏説十力経」の序に述べられているのである。このとき使節団が用いたルートは、カシュガルから「葱山」に入り、パミール高原、シュグナーン、ワッハーン、チトラル、ラムガーン、ウッディアーナ、ペシャーワルを経て当時のガンダーラの中心であったフンドへ至るというものであった (小野 1984)。このルートは、それよりも二百年余り前に宋雲が採ったパミール・ルートAとほぼ同じものであった。直接に先行する玄奘や慧超と異なるルートを通してこの使節団が北西インドに至ったのは、751年という時点の特殊な事情によるものだったと考えられる。

(2) カラコルム西脈ルート

張韜光らの旅の直前、747年に当時の安西都護高仙芝は中央アジアへの進出をはかる吐蕃を食い止めるため、インダス上流の勃律、すなわち現在のギルギット周辺へと遠征を行った。このとき高仙芝軍がタシュクルガンから一旦パミール高原を西へ越え、そこからワッハーン回廊へ入り、さらにボロギル峠、ダルコト峠を越えてギルギットを攻めたという事実は、すでにスタインが詳しく検証している (Stein 1922; cf. 平位 2003)。そこから明らかになるのは、740年代末、タシュクルガンからパミール高原を越えてバダフシャーンへ向かうルートは唐軍にとって通行可能な道だったが、ワッハーン回廊から勃律に至る地域は吐蕃の影響下にあったという事実である。

このことと関連しそうなのが、750年初めに吐火羅葉護から唐へ送られてきた使節である。吐火羅葉護は隣国である掲師国が吐蕃と結んで攻めてこようとしているので討伐して欲しいと求めてきた。これを承けて高仙芝は掲師を攻め、同地の王勃特没を捕らえて、その兄弟素迦を王位に据えたという (『資治通鑑』巻216)。当時吐火羅葉護はバダフシャーン近辺にいたと考えられ、吐蕃と組んでこれを攻めようとした掲師はおそらくクナル川上流のマストゥージあたりにあった国と思われる。高仙芝の遠征の結果、クナル川上流域に親唐の政権が建てられたのであり、このことからタシュクルガン、ワッハーン、パンジ川流域は唐の勢力にとって通行可能なルートを提供していたと見て良いだろう。

さらにテュービンゲン大学のコレクションにおさめられているバダフシャーン発行方孔貨もこの推測を補強してくれそうである。同貨幣は形態は開元通宝に類似しつつ、銘文はアラビア文字で刻まれている (Schwarz 2002: 36)。このことから8世紀前半、バダフシャーンが中国の強い影響下にあったことが知られるのである。

(3) アラブ・ムスリムの東進

一方、ソグディアナは8世紀初頭、アラブの支配下に組み入れられ、さらに750年にアッバース朝が成立した後はトハーリスタン方面にもアラブの支配が深くおよんでいった。すなわち750年頃にはバルフ総督アブー・ダーウドによるフッタル (現タジキスタン共和国クラーブ周辺) 征服がなされ (Williams 1985: 197)、またヒンドークシュ山脈に近いマドルのまちにアッバース朝総督が置かれ、徴税を行っていたことが、新発見のアラビア語文書からわかる (Khan 2008)。かくしてかつて行歴僧達が通ったトハーリスタン、ソグディアナ、さらにはその北のタラス方面も、唐にとって閉ざされた地となっていたのである。

3. 使節団の旅行期間

以上の状況を勘案するなら、751年、おそらくはタラス河畔の戦いの前後に長安を発った使節団にとって北西インドへ抜ける唯一可能なルートは上に述べたパミール・ルートAしかなかったのだろう。このことと照らし合わせて興味深いのはこの使節団がガンダーラに到達するまで随分と時間をかけている、という事実である。同じルートを通った宋雲は洛陽からトハーリスタンまで一年弱で到達しているが、張韜光使節団は最も短く見積もっても一年半かけて旅をしている。しかも、罽賓王が冬期ガンダーラに滞在していることさえも把握しておらず、一旦カーブルに向かいかけてから、引き返してガンダーラに至っているのである。パミール周辺の状況が混迷する中で、慎重に情報を収集し、安全なルートを模索しながら時間をかけて旅を完遂したことがその背後に透けて見える。

このような大状況の中であらためて張韜光使節団の旅を見るなら、実はそのルートは750年頃のアラブ・ムスリムと吐蕃帝国の勢力圏の丁度境界線上をたどるものであったと言えよう。タラス河畔の戦いおよびその直後の安史の乱の勃発によって唐は西域経営から撤退し、行歴僧がパミールを越えた記録も少なくなるが、もちろんこのルートを用いた人やモノの交流が途絶したわけではない。冒頭に述べたように険しい自然地形はこの地域を越える旅の経路をある程度限定すると見て間違いない。その証拠に790年に悟空が長安へと戻った際には、彼は玄奘や慧超のようにパミール・ルートBを用いているのである。

参考文献表

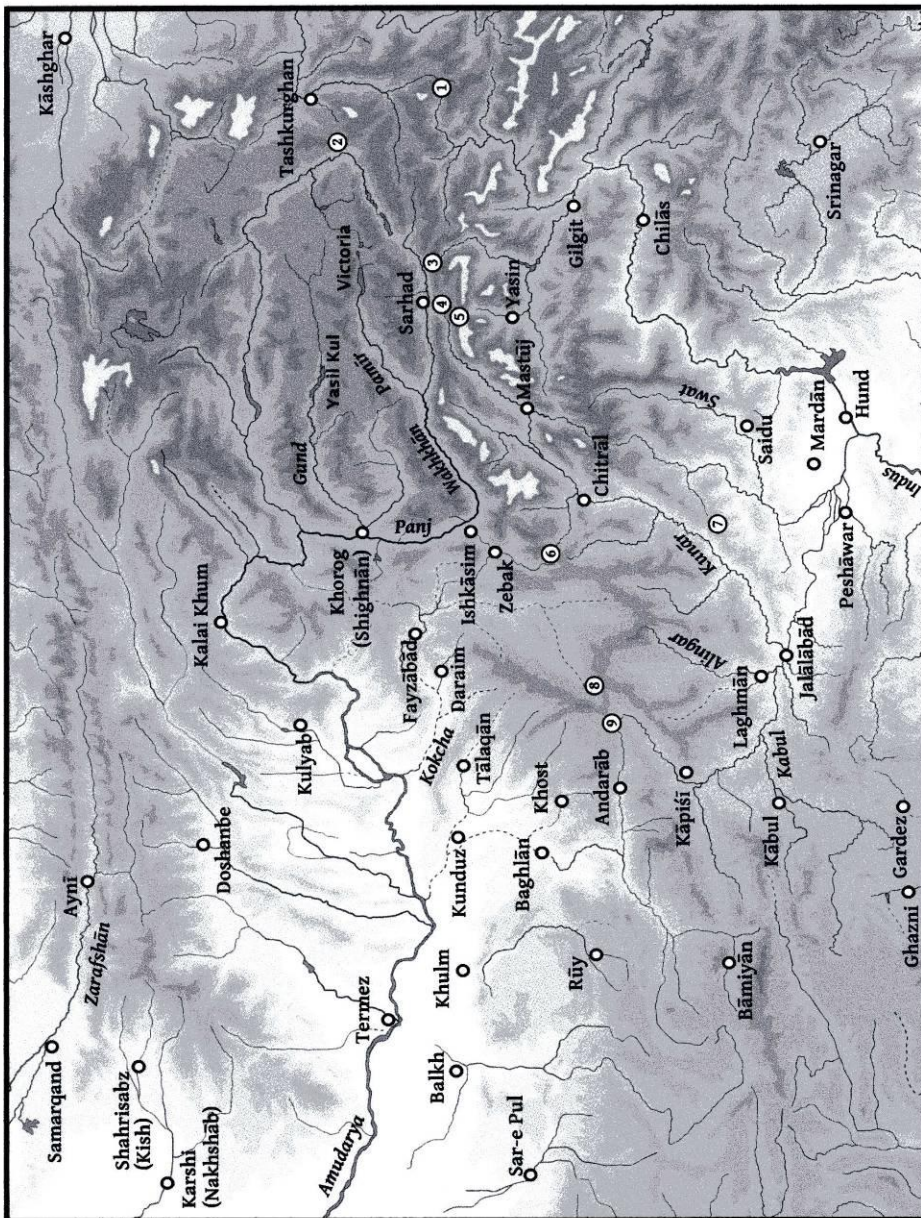
- Alram, M. & M. Pfisterer (2010) Alkhan and Hephthalite Coinage. *Coins, Art and Chronology* II, M. Arlam, D. Klimburg-Salter, M. Inaba & M. Pfisterer (eds.), Vienna: Austrian Academy of Science, pp.13-38.
- Beckwith, C.I. (1987) *The Tibetan Empire in Central Asia*. Princeton: Princeton University Press.
- 平位剛 (2003) 『禁断のアフガーニスターン・パミール紀行--ワハーン回廊の山・湖・人--』 京都：ナカニシヤ出版.
- Karev, Y. (2002) La politique d'Abū Muslim dans le Māwarā'annahr. Nouvelles données textuelles et archéologiques. *Der Islam*, 79, pp.1-46.
- Khan, G. (2008) *Arabic Documents from Early Islamic Khurasan*, Nour Foundation, London.
- 桑山正進(訳注) (1987), 『大唐西域記』 中央公論社.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』 京都大学人文科学研究所.
- 桑山正進(編) (1992) 『慧超往五天竺国伝研究』 京都大学人文科学研究所.
- Lévi, S & Éd. Chavannes (1895) L'itinéraire d'Ou-K'ong, *Journal Asiatique* 1895/2, pp.341-384.
- Melzer, G.(2006), A Copper Scroll Inscription from the Time of the Alchon Huns. *Manuscripts in the Schøyen Collection: Buddhist Manuscripts* Vol. III. J. Braavig (ed.), Oslo, pp.251-314.
- Minorsky, V. (1970) *Ḥudūd al-'Ālam (The Regions of the World)*. C.E.Bosworth (2nd ed.), Cambridge University Press.
- 森安孝夫 (1984) 「吐蕃の中央アジア進出」 『金沢大学文学部論集：史学科篇』 4, pp.1-85.
- 聶静洁 (2009) 「唐釈悟空入竺、求法及帰国路綫考--《悟空入竺記》所見絲綢之路, 『欧亜学刊』 9, pp.161-179.
- 小野勝年 (1984) 「空海の将来した「大唐貞元新訳十地等経記」--「悟空入竺記」のこと--, 『密教文化』 148, pp.48-80.
- Sachau, E. (1983) *Alberni's India*, Delhi: Munshiram Manoharlal (reprint).
- Schwarz, F. (2002) *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen: Balḥ und Landschaften am Oberen Oxus XIV c Ḥurāsān III*, Berlin: Ernst Wasmuth Verlag Tübingen.
- Sims-Williams, N. (2007) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan II: Letters and Buddhist Texts*. London.
- Stein, M.A. (1896) *Notes on Ou-k'ong's account of Kaçmīr*. Sitzungsberichte der Kais. Akademie der Wissenschaften in Wien, philosophisch-historische Classe. Wien.
- Stein, M.A. (1922) A Chinese expedition across the Pamirs and Hindukush, A.D. 747, *The Geographical Journal*, 59-2, pp.112-131.
- Stein, M.A (1933) *On Ancient Central-Asian Tracks*, London: Macmillan.

王小甫 (2000)「七至十世紀西藏高原通其西北之路」『春史卞麟錫教授停年紀念論叢』釜山：
圖書出版公司, pp.305-321.

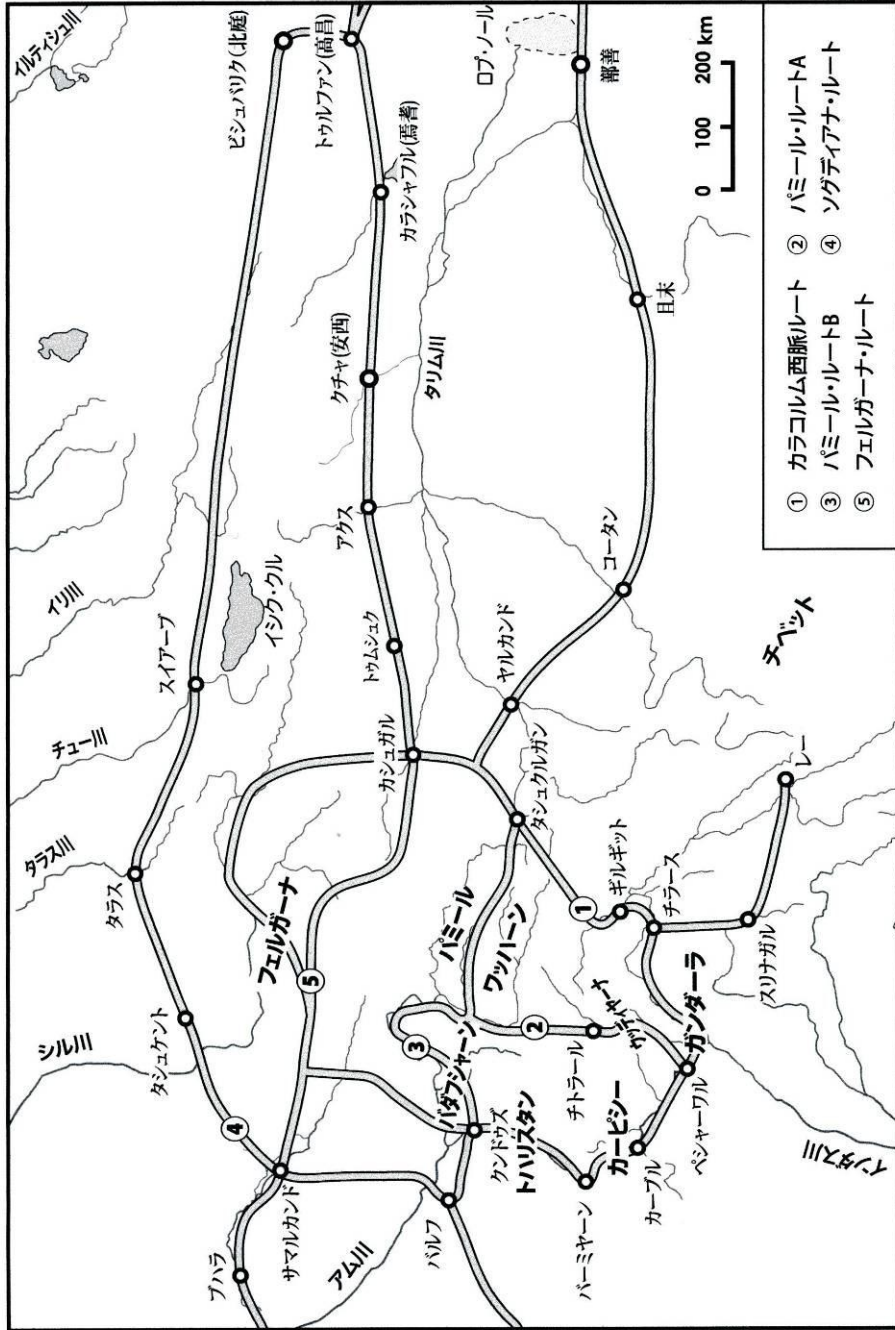
Williams, J.A. (1985) *The History of al-Ṭabarī*, vol. 27: *The 'Abbāsīd Revolution*. Albany: SUNY
Press.

主要な峠

1. Khunjerab Pass
2. Nayzatatash Pass
3. Ishkoman Pass
4. Boroghil Pass
5. Darkot Pass
6. Dorah Pass
7. Lowari Pass
8. Anjoman Pass
9. Khawak Pass



地図1 カラコルム～パミール～ヒンドゥークシュ



地図2 主たる入竺経路

2. 第2回研究会

2012年1月28日、東京大学本郷キャンパス法文1号館2階217教室において第2回研究会を公開形式で中央ユーラシア研究会と共催した。参加者は報告者を含めて15名であった。本公募研究の代表である澤田稔と研究協力者の河原弥生氏が山岳バダフシャーにおける調査の成果について報告し、秋山徹氏がクルグズ人とイスラームについての研究発表をした。

最初の報告者、澤田稔は「2011年タジキスタン共和国山岳バダフシャー自治州調査報告」と題して、8月7日から19日にかけてタジキスタンで実地調査した行程と史跡（特に聖地とその関連施設）について報告した。特に、同自治州の西半部（西パミール）と東半部（東パミール）の景観、交通状況、住民の相違を画像で紹介するとともに、訪問した史跡の画像と関連資料を提示した。

続いて、河原弥生氏が「タジキスタン共和国山岳バダフシャー自治州における民間所蔵文書調査報告」の題目で報告した。自治州の概要やイスマール派の歴史を整理した上で、上記澤田の調査で収集した史料を、2009年に収集した史料も含めて、その所蔵者、執筆年代、内容、由来を総合的に紹介した。さらに、19世紀半ばから20世紀半ばにかけての文書3点をサンプルとして提示した。

最後の報告、秋山徹「イスラームをめぐる北部クルグズ指導者の動向」は、本公募研究のもうひとつの対象とするべきクルグズ人に関する歴史研究である。ロシア統治下のクルグズ社会を研究する秋山氏は、19世紀末から20世紀初頭における北部クルグズのマナプと称される指導者層とイスラームの関わりを、モスクの建設、聖地巡礼、1905年革命への反応、教育、定住化、シャリーアという諸側面から検討し、当時期の山岳地域（ナルン、アト・バシ）におけるクルグズ人の動向とイスラームの状況を明らかにした。ロシア植民地当局の文書と、マナプであるオスマンアリー・スウドッコフの著作『シヤドマーンに捧げしクルグズの歴史』（1914年）に基づく堅実な研究である。

3. 第3回研究会

2012年6月23日、東京大学本郷キャンパス法文1号館2階217教室において第3回研究会を中央大学人文科学研究所・研究チーム「イスラーム地域における聖地巡礼・参詣」（代表：新免康・中央大学教授）と公開形式で共催した。澤田稔が司会を務め、守川知子が講師紹介をおこなった。なお、講演と質疑応答は英語でなされた。出席者は12名であった。

今回の研究会では、スコットランドのセント・アンドリュース大学社会人類学部（Department of Social Anthropology, University of St. Andrews, Scotland）のペドラム・ホスロネジャド博士（Dr. Pedram Khosronejad）を招聘し、イラン西南部の山岳高原におけるバフティヤリー遊牧民の宗教生活についての講演（“Some Reflections on the Diversity and Religious Functions of the Sacred Stones and Holy Places of the Bakhtiyari Nomads from the South-west of Iran”）と同氏作成のビデオフィルムを視聴した。長期の現地調査と生活体験にもとづくバフティヤリー遊牧民の移動生活と宗教施設（墓地、廟、ライオン石など）の関わりについての具体的資料の提示と分析は、中央アジア山岳高原部のイスラーム文化という考察視座への示唆もうかがわれ、本公募研究にとって意義深いものであった。

4. 第4回研究会

2012年9月29日、東京大学東洋文化研究所3階大会議室において第4回研究会を国際会議の形式で開催した。報告者等を含めて参加者は15名であった。2年間にわたる本公募研究を総括する報告会として、海外調査で収集した文書資料に関する研究活動とその成果についての2つの報告と、それに対するコメントを柱とし、一般参加者との質疑応答も行われた。司会は稲葉穰氏が務めた。

まず、澤田稔が“Badakhshan project and its activities”と題して、タジキスタン山岳バダフシャー自治州西南部のイスマーイール派信徒居住地における文書収集（複写）作業の過程を調査地順に紹介した上で、総計164点にのぼる収集文書を調査地や所有者ごとに分け、所有者の情報（家系・地位など）とともに文書の年代・言語・様式・内容等の特徴についてごく簡便に整理して収集作業の総体を示した。全般的に言えば、収集文書の大部分は19世紀後半から20世紀初頭にペルシア語で書かれており、イスマーイール派信徒の聖俗の生活に直接かかわる内容を有している。

続いて、バダフシャー調査における我々の貴重なパートナーである、タジキスタン共和国山岳バダフシャー自治州ハールグ市在住のウミード・ママドシェールザードシャーエフ氏 Umed Mamadsherzodshoev が“Girdovari va tahqiqi asnodi ta'rihii Pomir”（「パミールの歴史資料の収集と研究」）と題してタジク語で報告し、河原弥生氏（イスラーム地域研究東京大学拠点研究員）が日本語の逐次訳をおこなった。ウミード氏はパミール（バダフシャー）地域の民間に私蔵されている写本・文書など歴史資料の散逸に危惧し、それらの資料とりわけ文書に対し僅かな研究しかされてこなかった現状を指摘した。その上で本公募研究により収集（複写）されたペルシア語文書群、とりわけイスマーイール派に関する諸文書（インド在住のアーガー・ハーンからの命令書・宗教税領収書など）と住民の世俗生活にかかわる証書類（金品・土地などの購入・貸借など）について、作成の時代背景や教派組織、裁判所制度などに触れつつ解説をした。

最後に、フランスのステファン・デュドワニオン氏 Stéphane A. Dudoignon から2つの報告に対し、裁判制度の変遷、系譜書（nasab-nama）、地域的歴史叙述など広い視野から多岐にわたるコメントが寄せられた。

II. 海外調査

1. タジキスタン共和国山岳バダフシャー自治州

(1) 実地調査行程記

本公募研究の研究構成員である澤田稔と稲葉穰、同研究協力者の河原弥生の3名は、2011年8月6日から21日の日程でタジキスタン共和国に出張し、文書資料の探索と複写（PCのスキャナーやカメラによる）、歴史的建造物などの史跡の観察を主とする実地調査をおこなった。その主な対象地域は同国東半部にあたる山岳バダフシャー自治州である。調査にあたって同国のウミード・ママドシェールザードシャーエフ氏の支援を得た。

踏査の行程は以下のとおりである。四輪駆動車で首都のドゥシャンベから山岳バダフシャー自治州に入り、文書調査と歴史的建造物などの観察をおこなった。州都のハールグ市内で9点、ルーシャーン郡バツルーシャーン村で10点の文書を複写した。ルーシャーン郡ヴァーマル町ではシャー・ターリブの廟を、ハールグ市北郊テム村でザイヌルアービディーンのカダムガーフ（「足跡の地」）を訪ね内部を観察することができた。

ハールグ市からシュグナーン郡のグント渓谷沿いのパミール・ハイウエーをさかのぼり、途中の村落と沿道の史跡を訪ねた。リーヴァク村で文書調査をおこない、1点を複写した。バーゲヴ村の古代遺跡カーフィル・カラの岩山には円形の遺跡が見られるだけでなく、登り口にムスリム聖地もあり、注目される。ムーン村とヴァンカラ村の間の沿道には、スミ・ドゥルドゥル（「ドゥルドゥルの蹄」という聖地もあった。ヴァンカラのイマーム村には、シーア派の第5代イマーム、ムハンマド・バーキルのカダムガーフがある。

パミール・ハイウエーはグント河から離れると次第にパミールの高原部へ入っていく。コイ・テゼク峠（高度4272m）を越えてムルガーブ郡に入ると、広やかな丘陵地にヤクが放牧されている光景も見られた。アリチュール村は戸数200で、パミーリーとクルグズが混住しているという。また、アリチュール村の西方、ヤシル・クル湖近くのブルン・クル村にはパミーリー20家族、クルグズ16家族が住んでいるという。ムルガーブの町からゾル・クル湖方面の道を取り、ジャルトウ・グンバズを経てイシュカーシム郡のランガル村にたどり着いた。



アリチュール村



ヤシル・クル湖



ムルガーブの町



ジャルトウ・グンバズの廃墟

ランガル村で聖地シャー・カンバリ・アフターブの向かいに位置する博物館（アーサール・ハーナ）（集会所ジャマーアト・ハーナともいう）の建物の内部を見学してから、ハールグ市への帰還の途中、ヴラング村の「仏教遺跡」の麓にある聖地アブドゥッラー・アンサーリーを訪れた。さらに、温泉地ガルム・チャシュマにおいて温泉と結びついた聖地を観察した。

ハールグ帰還後は、近郊で文書調査をおこない、シュグナーン郡のスーチャーン村で 19 点、いずれもラーシュトカルア郡に属するタヴデム村で 1 点、ヒドルジェヴ村で 8 点の文書を複写した。今回の文書調査の結果、20 世紀初めの土地関係の証書、宗教指導者の系譜書、アーガー・ハーン 1 世、2 世、3 世の書簡などを含む合計 48 点の文書を複写できた。これらの文書資料と上記のムスリム聖地の観察データは中央アジア山岳高原部の社会と宗教文化を考究する上で貴重な材料となろう。日程の都合でドゥシャンベにおいて十分な時間を調査に割くことが難しかったけれども、市内のタジキスタン考古博物館を見学した。

(2) 聖地と関連施設

①シャー・カンバリ・アフターブとジャマーアト・ハーナ／アーサール・ハーナ——イシュカーシム郡ランガル村——

幹線道路の北側（山側）にシャー・カンバリ・アフターブの廟、南側（パンジュ河方向）にジャマーアト・ハーナ（集会所）またはアーサール・ハーナ（博物館）と呼ばれる建物が位置している。廟の敷地の東側に接して山から清らかな小川が流れている。敷地に入ると、アーテシュダーンという設備があり、左手に廟に入る門がある。その門を入っても中に墓は見当たらなかった。調査協力者のウミードさんの話では、金曜日に人々が集まり、アーテシュダーンでストラトメと呼ばれる植物を燃やして煙を出し、煙によって天使を呼び出す。天使が人を助けてくれるという。ランガル村のハリーファの話によると、シャー・カンバリ・アフターブは8世紀にエジプトで任命され、ここに来てイスマーイール派を伝えたという。ただし Iloliev の論考によると、シャー・カンバリ・アフターブのワハンへの訪問の時期はイスマーイール派のダーイー（教宣員）ナースイリ・フスラウ（11世紀の人）の伝道の数世紀（some centuries）後のことであろうと推定できるという（Iloliev 2008: 67）。

2009年夏に幹線道路南側の建物について地元の人からムゼイ（博物館）であるとの説明を受けたが、内部は見なかった。Ilolievによると、1993年にこの博物館は開設され、ワハンにおける museum-shrine（博物館廟）開設のモデルとなったという（Iloliev 2008: 70）。2011年夏にランガル村を再訪した際に、この博物館のなかを見ることができた。3つの部屋からなり、入口を入った部屋の机の上にアンティークが並べてある。奥にふたつの肖像画が飾ってある。向かって左手はハズタト・アリー（預言者ムハンマドの従弟で娘婿）、右手はナースイリ・フスラウであるという。2つの目の部屋は横長の休憩室のようなところ、一番奥の部屋はパミール風の住宅を模している。この建物でナマーズ（礼拝）、イード（祭り）などが行われるという。カダーイーという宗教的な料理もここで食されるという。このような部屋の模様をみると、この建物は博物館としてよりも集会所ないし宗教施設の性格のほうが強いと言えよう。



シャー・カンバリ・アフターブ敷地の門



アーテシュダーン



シャー・カンバリ・アフターブのマザール本体の門と内部（以上4点、2009年9月撮影）



ジャマーアト・ハーナ/アーサール・ハーナ



アリー（左）とナースイリ・フスラウ（右）



ジャマーアト・ハーナ（集会所）



羊の角（ジャマーアト・ハーナの飾り）

②アブドゥッラー・アンサーリー——イシュカーシム郡ヴラング村——

仏教のストゥーパとされる遺跡のある丘の下に、11世紀に生きた有名な神秘家でスーフィー詩人アブドゥッラー・アンサーリーに捧げられた廟と博物館 Osorkhonai Abdullo Ansori

がある (Middleton 2010: 102)。2011 年に再訪して敷地内に入ることができたが、廟といっ
ても墓はない。



アブドゥッラー・アンサーリー廟敷地の入口



アブドゥッラー・アンサーリー廟



集会所 / 博物館 (内部未確認)



仏教遺跡のある丘

③ムバーラキ・ワハーニー——イシュカーシム郡ヤムグ村——

太陽の動きを見る穴の開いた石がヤムグ村の道路脇にある。そこから山の上に廟が遠望
できる。それはスーフイー・ムバーラキ・ワハーニー (1839/43-1903 年) の廟で、孫が建
てたという。村のなかにムバーラキ・ワハーニーのムゼイ (博物館) がある。チッラ・ハ
ーナもあるが、もともとはそこにはなかったという。スーフイー・ムバーラキ・ワハー
ニーが暮らしていた家も村の中に現存する。

Iloliev によると、「ムバーラキ・ワハーニーは傑出した地元の神秘詩人のひとりで、音楽
家・天文学者・画家・紙製作者であり、全生涯をワハン溪谷のヤムグ村で過ごした」とい
う。そして「1994 年に開設された彼の博物館廟 (museum-shrine) は、地元の宗教帰依と
地域の社会・文化的活動の最も重要なセンターである」という (Iloliev 2008: 70)。アーサー
ル・ハーナと呼ばれる建物は 3 つの区画に分けられている。すなわち、「古代ワハンの様々
な民族誌的物品を実物解説するための展示ホール (*tālār-i namāish*)、ムバーラクの手稿本
とほかの本が保管されている小図書室 (*kitāb-khāna*)、*qasīda* の朗読の儀式の時やほかの社
会的イベントの時にも用いられる座るための壇」である (Iloliev 2008: 71)。



太陽観測の石



ムバーラキ・ワハーニー博物館の敷地入口



ムバーラキ・ワハーニー博物館



博物館の横にあるチツラ・ハーナ (以上4点、2009年9月撮影)

④ファーティマイ・ズフラー——イシュカーシム郡ヤムチュン川上流) ——

ヤムチュン村で幹線道路から離れ、狭い車道を登っていくと、Yamchun Fortress という説明板がある要塞跡に到着する。説明板によると、この要塞紀元前3世紀-前1世紀のものと考えられているという。地元では Yamchun Fortress という名前では呼ばれておらず、カフカハのカラなどと呼び伝えられてきたという。ここからビービー・ファーティマの温泉施設 (サナトリウム) が見える。車に付けられている高度計は 3,000 メートルを指している。



ヤムチュン城塞ヤムチュン村上手)



ヤムチュン要塞からファーティマイ・ズフラー方面を望む



ファータイマイ・ズフラー入口



ファータイマイ・ズフラー（礼拝室入口）



礼拝室内部



ファータイマイ・ズフラー（温泉浴室）（以上6点、2009年9月撮影）

⑤シャーヒ・マルダーン——イシュカーシム郡ナマドグーティ・パーヤーン村——

ナマドグーティ・パーヤーン村の近く、Middleton によれば Namadgut の村の近く 10km ほど東方に (Middleton 2010: 92)、パンジュ川に面してカフカハの要塞と呼ばれる広大な遺跡があり、そのそばの山側道路脇にシャーヒ・マルダーンの廟 *Ostoni Shohi Mardon* がある。カフカハはワハンを統治して地域のイスラームへの改宗の頃に敗北した、火を崇拝する部族 *Siah-Posh*（「黒い服を着た」）の指導者であったと信じられている (Middleton 2010: 92)。また、アリーとその息子（ハサンとフサイン）に率いられたアラブ軍がカフカハの王国を征服した際に駐留した場所が、この聖地になったという伝承が語られている (Iloliev 2008: 65)。

蓮池利隆氏は廟の名称を挙げていないが、おそらくこの廟の内部にある立方体の設備を観察して、「なお、現在のパミールにおいても同様に現世の利益を願って神々を崇める民俗信仰が依然として存在している。それはゾロアスター教が民俗信仰と結びついたもので、イスラームの聖人霊廟には3つの聖火炉があり、太陽神の使いである山羊の角の供物（くもつ）が見られる」と述べ、廟内の設備とゾロアスター教との結びつきを指摘している (蓮池 2010: 277-278)。

デンマーク・パミール調査隊 (1896-97、1898-99) を率いた O. Olufsen は「ガランにお

いて最も神聖な場所がガルム・チャシュマ・ダルヤー河のほとりの祭壇つきの温泉にあるように、ワハンやイシュカーシムにおいて、Hazreti Ali への祭壇または、むしろ記念物が最も神聖な場所であるように思われる。地元民はその記念物がどのアリーののために建てられたのか知らない。しかし、彼がマホメットの義理の息子であったことはほとんど疑いない。実に彼はシーア派の宗教においてマホメットより重大な役割を果たしている」と述べ、**Namatgut** 付近の Hazreti Ali の聖域の施設について詳細に記述している (Olufsen 1904: 157-158, 161)。この Hazreti Ali の聖域はシャーヒ・マルダーン・ハズラティ・アリーの廟がある所にほかならない。長文ではあるが、この廟の建物とその内部の祭壇などについての彼の描写を以下に引用する。

「ワハンにおけるこの記念物は、かつてその場所で休息した神聖なアリーの記念に建てられたと言われている。それは、おおよそ 6 フィートの高さ、9 フィート四方の土製の小屋である。小屋への入り口は木製の扉を通してであり、この扉のそれぞれの側に、ワハンでよく見られる、坐るために用いられる壇がある。小屋に、1 メーター四方の基壇に約 3 フィートの高さの立方体の粘土製祭壇があり、すべて白墨が塗られている。祭壇の上に直径 17 センチメートルの大きな丸い黒石がふたつ置かれている。そして、それらふたつの石のあいだに、同様だがより小さい、鶏卵の大きさの石がさらにある。大きな丸い石のかたわらに、角笛 (tooting-horns) のためのふたつの雌牛の角が置かれている。そのうちのひとつの周りに銅の輪があった。祭壇の頂にある小さな棚に、ランプとして使われた小さな陶製の碗が置かれている。祭壇の前面に小さなランプが小さな三角形の壁がんに置かれている。それはへこんだ石で作られていて、そのかたわらに芯の付いた鉄のランプ (“chirák”) があった。祭壇の基部の棚のうえに、銅のロウソク立て、あるいは、むしろ碗がふたつ置いてあり、いくらか曲がった銅の枝状のものによって台に結ばれており、その尖った先端は棚のうえの木片に結ばれていた。入り口の左側、壁の穴に白いヤク-雄牛の尻尾があった。それは濃い色の物よりもさらに神聖なシンボルである。祭壇から屋根の穴を通っている竿のうえに、赤と白の旗が建物のうえで揺れている。それら 3 本の旗竿の先端には、いわゆる kobbá があり、そのふたつはスズメッキの銅で、ひとつは釉薬をかけた粘土でできている。小屋の周りには、高い石壁で囲まれ木陰の多い手入れの行き届いた果樹園がある。小屋の修繕の良い状態や、小屋が清掃され果樹園が手入れされている世話や、老人が聖域の保護に指定されていること——サイト、預言者の子孫——をワハンの見地から判断すれば、ここはワハン人の極めて神聖な場所とみなされるべきである」(Olufsen 1904: 157-158, 161)。

また、Olufsen はこの聖域の起源に関して「Hazreti Ali 自身が Siaposh に対してタジク人

を率いるために地上に降りたという伝説がある。Ka'a-ka [カフカハのこと] はその全軍とともにイシュカシム峠を抜けて Kafiristan に退却せねばならなかった。Hazreti Ali の聖域が Ka'a-ka の破壊された要塞の近くに建てられたのは、この出来事を記念してであった」と述べている (Olufsen 1904: 175-176)。

Olufsen の描写や挿絵 (スケッチ)、蓮池氏の写真 (撮影年月は記されていない)、我々の写真 (2009 年 9 月) の三つを比べると、廟の内部はかなり整理されて簡素化されていたことが見て取れる。



シャーヒ・マルダーン廟の入口



シャーヒ・マルダーン廟の内部



シャーヒ・マルダーン廟の天井



カフカハ城塞 (以上 4 点、2009 年 9 月撮影)



5 バミール地方のイスラーム聖人霊廟 (左) と、廟内の 3 つの聖火炉と奉納された山羊の角 (右) (いずれも筆者撮影)

「イスラーム聖人霊廟」と「3つの聖火炉」(蓮池 2010: 277)



Namatgut 付近の Hazreti Ali の聖域と祭壇のある内部 (Olufsen 1904: 159. 161)

⑥ガラム・チャシュマ——イシュカーシム郡アンダラーブ村——

有名な温泉保養地であるガラム・チャシュマの石灰分で白くなっている岩の露天プール
の上方に石垣で囲まれた聖地がある。ウミードさんによると、名称は **Pure Shah** (プーレ・
シャー、「シャーの息子」の意) という。pur はイスラーム以前からの古いペルシア語であ
るとのこと。また、シャーは王の意味ではなく、イマームと同じ意味であるようだ。岩壁
に大型ヤギの角、ナン、石、黒く焼き焦げた大きな陶器のかけら、火を燃やす金属製の台
などが安置されている。陶器のかけらなどに手を触れて、その手を口と額につける動作を
するそうだ。左手の岩に小さな裂け目が縦に続いていて、水平面の途中から熱い湯がちよ
ろちよろ流れ出ている。緑の藻が細い流れの底に生えている。この細く浅い水路が円形の
露天風呂の岩の上までつづいていて、そこから露天風呂に流れ落ちている。

Olufsen はこの聖地を次のように描写している。「東側の最上部の源泉が出ている場所の
下、岩の段地 (terrace) に、小さな空地 (yard) が木製の柵で囲まれている。この空地は多
数の小さな源泉を囲んでおり、それらの源泉が通常の鉛筆が通るくらいの大きさの穴から
あわをたてて流れる。これは、柵で囲まれた四角形の所に注ぎ込む最上部の源泉の横の祭
壇 (altar) により示されているように、地元民 (natives) の聖域 (sanctuary) である。祭壇
は水源の横の岩のいくつかの自然洞窟からのみになっている。それらの洞窟の棚に小さな銅
製のランプ、小さな陶器のランプ、丸くて黒い石が置かれている。祭壇の上に、棒につけ
られた白い旗があり、棒の先に、鉄の薄板で作られた、指のふくらんだ [ひろげられた?]
手がある。この手は、後で示されるように、疑いなく象徴的な意味をもっている。という
のは、それはワハンにおいて岩や石に刻まれているのがしばしば見られるからである。そ
れはまた、調査隊がコペンハーゲンの国立博物館に持ち帰った、銘文のある石においても
見られる。

陶器のランプは、トルキスタンにおいて通常用いられるチラークに似ている。銅製のラ
ンプは、これに反して [陶器のランプとは違って?]、20センチメートルほどの高さの台の

上に置かれた小さなお椀で、ねじれた把手がついている。我々は後で、ワハンにおける聖域の類似のランプを考察する理由があろう (?)。

祭壇前方の空地において地元民は祈禱を唱える。すなわち、彼らは特別の機会に灯されるランプの前に跪き、手で顔をおおう。牛が岩の上で殺され、裕福な人が肉を比較的貧しい隣人に分けるのは、宗教的大祭の場面である。

地元民はプールの硫黄臭の温水に入浴する。それは、彼らの言い伝えによれば、すべての病気を治す。我々の滞在中、裸の子供たちが摂氏 42 度の湯のなかに、しぶきを上げながら浸かっていた。そして、近隣の谷からこの聖地 (holy place) に巡礼がおこなわれる。赤色、灰色、緑色の藻が岩の側面の突出部のまわりに生え、硫黄を含む水蒸気が奇妙に幻想的な光景を添える。灰色の藻は摂氏 39 度の湯で生え、赤色の藻はやや低めの温度の湯で生え、緑色の藻はさらに低温の湯で生える」(Olufsen 1904: 30-31)。

Middleton は、「ガルム・チャシュマには Ali の廟がある。彼は竜と戦っている時に Zulfiqar の剣の一振りです温泉をひらいたと信じられている。木製の panja (手の象徴) とロウソク立てと木製の枠のある犠牲のための場所がある」と記述している (Middleton 2010: 91-92)。

Olufsen は「Gharm-chashma Darya 河の北岸、Shund 村 (kislak) の西、約 350 メーターに位置する間欠温泉はガラシ人 (Garans) にとって聖域 (sanctuary) である。この間欠温泉は Gharm-chashma (「温泉」と呼ばれ」と記しており (Olufsen 1904: 28)、ガルム・チャシュマの温泉自体が聖地であったことが分かる。また、「パミールのあらゆる所で多数見いだされる温泉は、パミールの溪谷の住民はもちろんキルギズ人によっても、入浴のためや病気治療として用いられる。それらは同時に一種の聖域 (sanctuary) と見なされる。我々はそのような温泉をパンジュ溪谷において山地の斜面で、[すなわち] Zunk の約 1 km 北や、Sirgyn 村 (kislak) の近くや、Barshar 村 (kislak) の約 3km 南において、Gharm-chashma Darya 河のほとり Shund 村 (kislak) にある前述の間欠温泉以外に見いだした」と述べ、ガルム・チャシュマ以外の温泉も紹介している (Olufsen 1904: 47-48)。



ガルム・チャシュマ



ガルム・チャシュマの聖地



ガラム・チャシュマの「祭壇」



ガラム・チャシュマの聖地から流れ出る湯



ガラム・チャシュマ (Olufsen 1904: 29)

⑦ナースィリ・フスラウの泉——シュグナーン郡ポルシェニェフ村——

2009年9月に訪ねたとき、泉（チャシュマ）は修復中であり、その横にナースィリ・フスラウ〔1004-72~78・88（森本 2002:705）；1003~61（清水 2002: 376）〕の像と記念館があった。2011年8月に立ち寄った時に泉は修復を終えていた。

パミーリー・イスマーイーリ派 (Pamiri Ismāʿīlism) において、ナースィリ・フスラウは最も重要な聖者のひとり、実に「聖なるプール」(*pīr-i qudūs*) と見なされている (Iloiev 2008:

64)。

地元の言い伝えは次のように主張している。すなわち、Nasir Khusraw が通りかかり、この村に水がないことを聞いた。彼は顔をメッカに向けて杖で地面を打つと、泉が出てきた。彼は杖を植え、それが今日そこにある柳の樹木に成長した。別の説明によると、Nasir Khusraw は喉が渇いていて、壺で水を運んでいる少女に水を求めた。彼女はそれを拒否し、彼は怒って地面を打った。現在その場所に茶店 (choikhona) がある。泉のそばの石には、Nasir Khusraw 自身によって彫られた——そう信じられている——言葉がある。(Middleton 2010: 80)



ナーシィリ・フスラウの像と泉



ナーシィリ・フスラウの像



ナーシィリ・フスラウの像 (2009年9月撮影)



ナーシィリ・フスラウの泉 (2009年9月撮影)



羊の角の飾り (ナーシィリ・フスラウの泉横手の樹木)



羊の角 (ナーシィリ・フスラウの泉の横手)

⑧ピール・サイイド・ファッルフ・シャー——シュグナーン郡サライー・バハール村——
サライー・バハール村はイスマーイール教派のピール (宗教指導者) が多く住んでいた

村である。山の斜面に沿う家と畑の小道にはアラビア文字の刻まれた石も見られる。

Shoinbekovによると、「サライー・バハール村のイスマイーリーのピールたちは、16世紀にサブザヴァール市（イラン）からシュグナンに移住したシャーマラング（Shomalang）の子孫である。別の異説によれば、彼は11世紀にシュグナンを訪ねた。1878-1879年にシャーマラングの子孫たちは、アフガンのシュグナンからピャンジュ河の右岸に移住し、サライー・バハール村を創設した。シャーマラングの子孫のなかで19世紀、20世紀初めの有名な宗教的指導者たち、すなわち、詩人のサイド・ファッルフシャー（Said Farrukhshakh）、その息子で詩人、天文学者、能筆家のシャーズダムハンマド（Shozodamukhammad）、有名なタビーブ（医者）、立派な活動家サイド・ユースフアリーシャー（Said Yusufalishakh）など。彼らは宗教に通暁した人で、権威ある社会的活動家であった。それ故に、サライー・バハール村は西パミールの重要な歴史的場所のひとつであり、そこには宗教的指導者たちのユニークな霊廟のみならず、能筆や岩石彫刻の豊かなコレクションもある」という（Shoinbekov 2009: 27-28, Cf. 5-6）



ピール・サイド・ファッルフ・シャー夫妻の墓



墓廟の天井

⑨ シャー・ターリブ——ルーシャーン郡ヴァーマル、ルーシャーン村——

パンジュ河に流れ込むきれいな溪流沿いに建物が建っている。3部屋からなる。入口の休憩所のような部屋はパミール風の造りである。アーガー・ハーン四世の肖像画、ライオンに乗ったアリーの絵が飾ってある。次の部屋には鍋のような調理用具がたくさん置いてあった。一番奥にシャー・ターリブという人物の墓があるが、壁の横幅いっぱいの長さでコンクリートのようなもので固めてある。ウミードさんによると、シャー・ターリブはイスマイール派の指導者であるとのこと。この建物はジュマーのナマーズやイードの時に使われるという。

伝説によると、シャー・ターリブは、ここで礼拝の集会をもよおしたナースィル・ホスロウ〔ナースィリ・フストラウ〕に出会った（Bubnova 2007: 98）。アースターン〔廟〕は1989

年にルーシャーン大村の若い人々により再建された (Bubnova 2007: 98)。また、地元の言い伝えによると、Sho Tolib Sarmast と Sayyid Jajol Bukhori は Nasr Khusraw の後、イスマーイー
ル派の宗教をパミールに広めたという。Sho Tolib はその名をもつ廟に埋葬されていると信
じられており、Sayyid Jajol は Tavdem [村] のその名をもつ廟におそらく埋葬されている
(Middleton 2010: 65-66)。



シャー・ターリブの廟



シャー・ターリブの墓



シャー・ターリブの墓



ライオンに乗ったアリー



アーガー・ハーン 4 世



シャー・ターリブ廟横の水路

⑩イマーム・ザイヌルアービディーン——シュグナーン郡テム村——

北からハールグ市に入ったところ、アフガニスタン領との間にかかる橋の手前、幹線道
路沿いにザイヌルアービディーンという名の聖地 (カダムガーフ) がある。建物の入口に
休憩所、奥に岩のある部屋があり、岩には広げた手 (大きいもの1つ、ちいさいもの幾つ
か) が表面に薄く彫られている。その部屋に墓石はない。

伝説によると、イマーム・ザイヌルアービディーン〔第4代イマーム〕は岩の上で休息し、そこに右手の跡を残したという (Bubnova 2007: 127)。



イマーム・ザイヌル・アービディーンのカダムガーフ

休憩室



手形の彫られた岩

⑪サイイド・ジャラルのマザール——ラーシュトカルア郡タヴデム村——

幹線道路脇にサイイド・ジャラルのマザールがある。この人物はイスマーイール派の指導者で、19世紀の人といわれる。1994年に新しい建物が建てられたそうだ。中の壁の銘文はウミードさんが書いたものという。建物の中に石積みのマザール本体が保存されている。敷地全体を庭園のようにしようとしているが、まだ樹木が十分伸びていない。

伝承によると、Sayyid Jalol Bukhari は16世紀にイランのトゥースから来たスーフィーの4兄弟の一人 Shoh Burhon の孫とされるが、タヴデムに現存する家系図は Sayyid Jalol がブハラから来たことを立証しない (Middleton 2010: 85, 86)。



⑫ハズラティ・アリーのカダムガーフとアリーの馬ドウルドゥルの足跡という岩の窪み—
—シュグナーン郡バーゲヴ村—

バーゲヴ村の果樹園の奥にカーフィル・カラという岩山がある、その入口は囲いがしてあり、岩にくぼみがある。カダムガーヘ・シャーヘ・ベフーヤテ（ハズラト・アリー）という聖地である。岩のくぼみはアリーの馬ドウルドゥルの足跡であるという。この聖地から岩山を登っていくと、岩山の上から円形の遺跡が見える。

Bubnova の解説によると、一つ目の聖堂 (svyatilishche) は大きな石、縁に石からなる囲いのようなものである。表面に丸いプランの天然の窪みがある。伝説によると、アリーの馬の跡 (kadamjo) (ris. 72 [145 頁の写真])。二つ目の聖堂は大きからぬ岩窟であり、その上に2つの丸い穴がある。岩窟への入り口の前に石 (複数) が置かれている (ris. 73 [146 頁の写真])。 (Bubnova 2007: 128)



カーフィル・カラの円形遺跡



ハズラティ・アリーのカダムガーフ



ハズラティ・アリーのカダムガーフ



ハズラティ・アリーのカダムガーフ

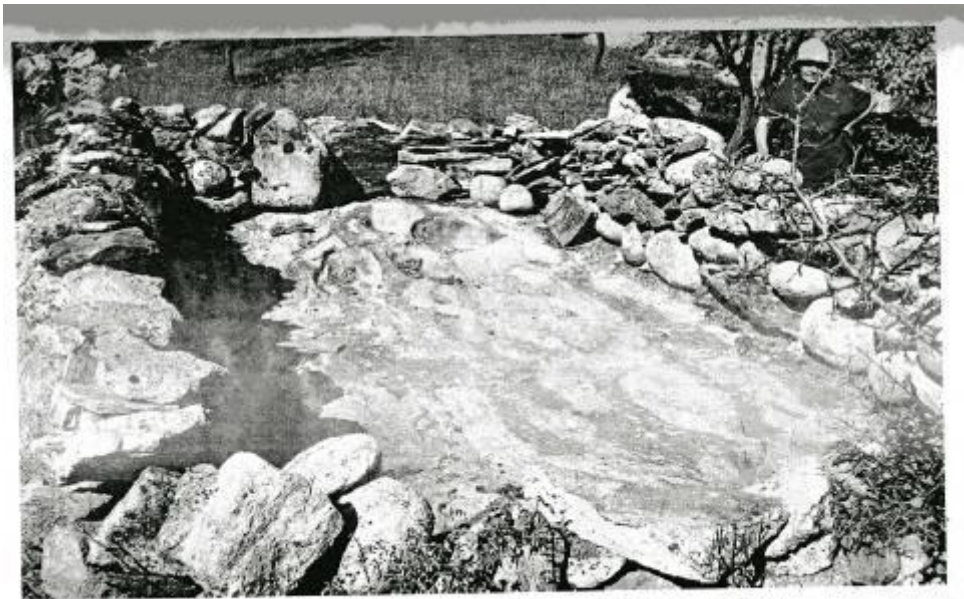


Рис. 72. Священный камень (Богств). По преданию — следы коня (калымский) Алт (М. Лезур, фото 2007 г.)

神聖な石——伝承によると、アリーの馬の跡 (Bubnova 2007: 145)



Рис. 73. Сакральное пространство у реки (М.Бубнова, фото 2007 г.)

バーゲヴ村東方の聖地 (Bubnova 2007: 146)

⑬スミ・ドゥルドゥル（「ドゥルドゥルの蹄」——シュグナーン郡ムーン村とヴァンカラ村の間——

シュグナーン郡のムーン村とヴァンカラ村の間の幹線道路の脇にスミ・ドゥルドゥル（「ドゥルドゥルの蹄」）という石が安置されている。この蹄の形に似た石に触れて祈願（願い事）するそうだ。



スミ・ドウルドウル



スミ・ドウルドウル (「ドウルドウルの蹄」)

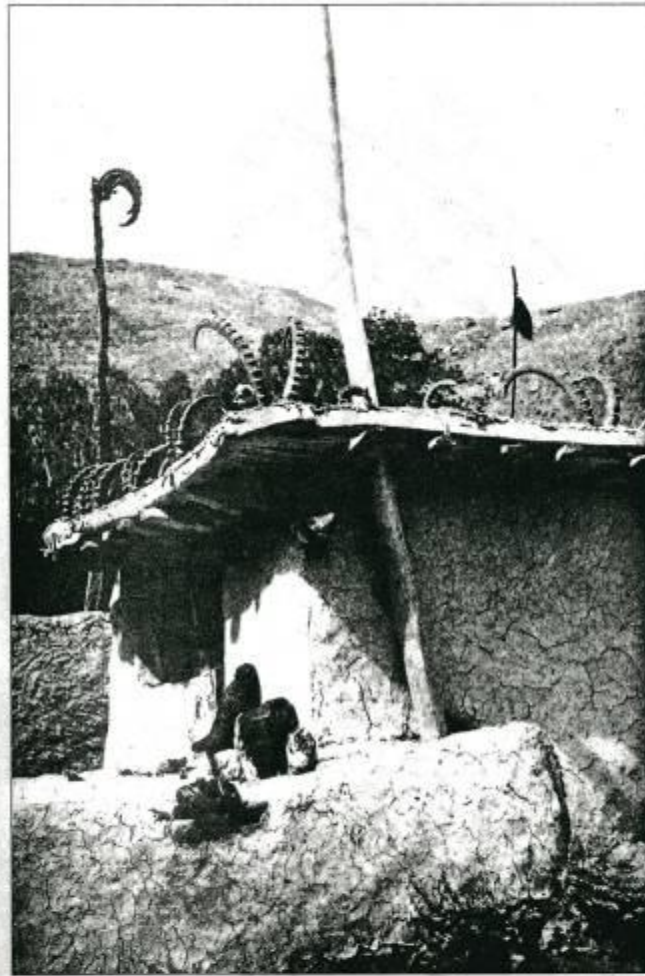
⑭イマーム・ムハンマド・バーキル——シュグナーン郡ヴァンカラ村——

ヴァンカラのイマーム村にカダムガーヒ・ムハンマド・バーキルという聖地がある。建物の入口脇の石にナンが置いてあり、火を灯した跡があった。建物の中には何もなく、隅に小石と火を灯した跡があった。休憩所（集会所）とおぼしき建物が横にある。1990年代の宗教自由化の時、ジャマーアト・ハーナを建設しようとしたが、アーガー・ハーンから認められず、断念したという。



イマーム・ムハンマド・バーキルのカダムガーフ





1



2

Рис. 84. Святцыще Имама Мухаммада Бокира: 1 – общий вид (по А.А.Бобринскому, фото П.Павлов, 1901 г.); 2 – металлическое навершие (по А.З.Розенфельд)

イマーム・ムハンマド・バーキルの聖堂 (1901年撮影) (Bubnova 2007: 146)



参考文献

- Bubnova, M. A., *Arkheologicheskaya karta Gorno-Badakhshanskoi avtonomnoi oblasti, Zapadnyi Pamir (pamyatniki kamennogo veka-XXv.)*, Dushanbe: Universitet Tsentral'noi Azii, 2007, 384 pp.
- 蓮池利隆「第6章 仏教信仰と社会 ― 遺跡にみる仏教信仰の諸相」『新アジア仏教史 05 中央アジア 文明・文化の交差点』東京：佼成出版社、2010年、264-287頁。
- Iloliev, Abdulmamad, “Popular culture and religious metaphor: saints and shrines in Wakhan region of Tajikistan,” *Central Asian Survey*, Vol. 27, No. 1, March 2008, pp. 59-73.
- Middleton, Robert, *The Pamirs—History, Archaeology and Culture*, [Khorog: University of Central Asia], 2010.
- 森本一夫「ナーシレ・フスラウ」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年、7705-706頁。
- Olufsen, O., *Through the unknown Pamirs, The Second Danish Pamir Expedition, 1898-99*, London: William Heinemann, 1904, xxii+238 pp.
- Shakarmamadov, N., *Sarchashmai Rivoyat-Voqeyiyat (Rivoyathoi Vakhon)*, Khorugh: Mountain Societies Development Support Programme, A project of Aga Khan foundation, 2007, 39 pp.
- 清水宏祐「ナーシル・ホスロー」日本イスラム協会ほか編『新イスラム事典』平凡社、2002年、376頁。
- Shoinbekov, A. A., *The Main Archeological Sites of Rushan, Shugnan, Ishkashim and Roshtkala Districts*, Khorog, 2009, 44 pp. (英語とロシア語)

2. クルグズ共和国

(1) 実地調査行程記

2012年8月4日から14日までの日程で、クルグズスタンにおける実地調査のため出張した。研究協力者としてクルグズスタン近代史の専門家である秋山徹氏（日本学術振興会特別研究員）に同行していただいた。クルグズスタンの首都ビシュケクには空路ソウル、タシュケントを経由して入った。経由地のタシュケントでは航空機の乗り換えのため1泊し、アミール・ティムール広場、シャイフ・ハーヴァンド・タフル廟、カルディルガチュ・ベイ廟、ユーヌス・ハーン廟を訪ねた。アミール・ティムール広場は樹木が切り取られて木陰がなくなっていた（治安対策という）。



アミール・ティムール広場



ユーヌス・ハーン廟

ビシュケクでは国立歴史博物館を訪ね、クルグズスタンの民俗資料や近代史に関する展示物を調べた。さらにアイギネ文化センターを訪問し、クルグズスタンの聖地に関する研究資料を入手した。ビシュケクの南郊、アラ・アルチャ自然公園へ行く途中にバイティクの廟がある。丘の斜面に墓地が広がっており、その入口にこの廟がある。墓守らしい老人が説明してくれた。1870年代に建てられたという。この廟のなかにはバイティク・カナイ（1820-1886、ソルト族の部族指導者）の墓はなく絨毯が敷かれており、そこで祈りがなされているのかと想像される。遺体は横手の草むらになっている所に埋葬されているという。墓地を奥に少し進むと、ウズベク・ボシュコイ（1820-1911、バイティクの遠い縁戚）の廟がある。大きな鳥かごのような形状はユニークである。どちらの廟の前にもベンチが据えられており、詣でる人たちがいることを示している。



バイティクの廟



ウズベク・ボシュコイ

ビシュケクからウスク湖の周囲、さらにコチコル、タラスを経てビシュケクへ戻る調査旅行に出た。車と運転手、宿泊所はビシュケクにある旅行社 Novi Nomad 社に手配してもらった。ウスク湖にいたる幹線道路に近いクラスナヤ・レーチカの遺跡とトクマク郊外のアクベシム遺跡を見学する。アクベシムの城壁跡はよく残っていて、上部には車の轍が残っている。ウスク湖沿岸に達する前に幹線道路を左折して大ケミンの流域に入る。狭い溪谷部を抜けると、盆地状の平原に出て村が現れる。シャブダン・ジャンタイ (1840-1912、サルバグシュ族の部族指導者) の廟を訪ねた。



クラスナヤ・レーチカの遺跡



アクベシムの遺跡



シャブダンの廟



大ケミンの盆地

ウスク湖東端のテュプ町の手前にバルバイ (1791/92/97-1867、ブグ族出身) の廟がある。建設中か改修中のようなのである。カラコルの民宿で 1 泊して市内の博物館、ドゥンガンのモ

スク、プルジェヴァルスキーの像のある公園を見学したのち、ウスク湖の南岸を西方へ向かった。サルウ村で左折してジュウクウ川沿いに広がる平野部を南へ進む。途中で出会った青年に訊ねて、ようやくバルチャクの廟を見つけた。幹線道路のすぐ西側の荒地にあるが、木立や草むらで道路からは隠れていて、よく見えなかったのである。建物の円形屋根は半ば崩れており、その下に墓があった形跡もない。ウスク湖南岸のほぼ中央部のトン村にマンジュルウ・アタという聖地がある。ビシュケクのアイギネ文化センターの職員から、有名なマザールであると聞いていた場所である。入口には管理ないし訪問者用とおぼしき建物があり、ゆるやかな丘陵のくぼ地に 7 つの泉水があり、病を治す効能があるとされている。西進してカラ・コオ村から幹線道路を南へはずれ山地沿いに進む。目的のトゥラ・スウの廟とコングル・オレンの廟を見つけられず、夕闇が迫ってきたので断念する。夜道を走りコチコル市の民宿にたどり着いたのは 21 時 20 分であった。



バルバイの廟の外観と内部



ドゥンガンのモスクの外観と内部



バルチャクの廟



マンジュルウ・アタ

翌日、コチコルから日帰りで廟の調査に行く。コチコル市とナルン市の間にはドロン峠（標高 3030m）があり、その北側の草原状の山裾にドロン・アタ・マザールがある。大きな岩石が柵で囲われており、横手に建物がある。ナルン市から西方に向かい、クルトカ川がナルン川に合流する地点のアクタラ村にタイリャク（1796-1838）とアタンタイ（1796-1837）の廟を訪ねた。ふたりは兄弟で、サヤク族の指導者である。この新しい建物は建築中なのか内部は荒れている。またその周辺には、かつてグンベズ（廟）であったとおぼしき荒廃した建造物がいくつか見られる。



ドロン・アタ・マザール



タイリャクとアタンタイの廟



タイリャクとアタンタイの廟の内部



タイリャクとアタンタイの廟の周辺

コチコルから幹線道路を西へ進み、タラス市に向かう。途中のクザルト峠（2670m）の

前後には草原が広がり、馬が放牧されている。ジュムガル川の沿道では墓地が多く見られ、グンベズの崩れた跡とみられる物も多くあった。ビシュケクとオシュをつなぐ快適な幹線道路に入ると、クムズ（馬乳酒）を売っているクルグズ人たちや放牧された馬群も目につく。タラス市の郊外にあるマナスの庭園（マナス・オールド）に到着し、外国人料金ひとり200スムを払って入園する。博物館と「マナスの廟」を見学する。一般的な観光客が多く見られるが、博物館前で祈りを捧げている家族づれもいた。また博物館の裏手にある小高い山に登っている人々もいた。



マナスの庭園内の博物館と小山



「マナスの廟」

タラス市に一泊して翌日、ビシュケクに向かう。途中のテヨオ・アシュウ峠（3586m）にはトンネルが掘られ幹線道路が通じている。峠の南側の幹線道路沿いは草原であるが、峠の北側は風景が一変して急峻な岩山や崖が迫る溪谷となっている。トンネルが開通し道路が整備されなければ、荷車さえも通過が困難な難所であったであろう。クルグズ山脈の北麓を東西に伸びる幹線道路を東進して、途中ビシュケク市の手前でジャルケバイのグンベズを探して農村部に入ったが、平凡な墓地を見ただけであった。ビシュケク市に帰還後、市内のラリテット書店などで資料を収集して調査を終えた。

(2) 墓廟とマザール

①バイティクの廟とウズベク・ボシュコイの廟——チュイ州バイティク Baytik 村——

バイティク・カナイ (1820-1886) はソルト Solto 族のマナプ (部族指導者)。ピシュペク要塞 (コーカンド・ハン国) 攻略で功績をあげ (1862)、ロシア帝国から陸軍大尉の軍位を授けられた。ウズベク・ボシュコイ (1820-1911) はバイティクの遠い縁戚で、マナプ。バイティクの死後、アウリエ・アタ郡からピシュペク郡に移住した。

②シャブダンの廟——チュイ州シャブダン Shabdan 村——

シャブダン・ジャンタイ (1840-1912) はサルバグシュ Sary-Bagysh 族のマナプであり、ロシア帝国に臣従して (1862)、コーカンド・ハン国征服に協力、陸軍中佐の軍位を授けられた。

③バルバイの廟——ウスク・キョル州バルバイ Balbay 村——

バルバイ (1791/92/97-1867) はブグ Bughu 族の出身。当初クルグズのロシアへの併合を支持、後に植民地当局との闘争に参加、逮捕され獄中で死去した。廟は 1991-92 年に修復された。

④バルチャク Balchak の廟——ウスク・キョル州サルウ Saruu 村の南方——

廟はカシュガルの職人により建てられたという。富裕なバイ (bay) であったバルチュクは生前に当地のほかにカシュガル、中央天山においても廟を建てていたという。

⑤マンジュルウ・アタ Manjly-Ata——ウスク・キョル州トン Tong 村——

7つの泉水があり、それぞれ名前が付けられている。主たる泉の名がマンジュルウ・アタ。泉水には効能 (甲状腺腫、内蔵全般、肝臓・胃、眼) があるという。

⑥ドロンのアタ・マザール Dolon Ata Mazary——ナルン州ドロンの北麓——

⑦タイリャクとアタンタイの廟——アクタラ Ak-Tala 村——

タイリャク (1796-1838) とアタンタイ (1796-1837) は兄弟で、サヤク Sayak 族出身。1820年代のジャハーンギール・ホージャのカシュガル侵入や逃避に協力。タイリャクは、

アクタラを襲撃した清軍を追撃して壊滅させた。兄弟の軍勢は 1831 年にコーカンド・ハン国と闘うも敗れる。1830 年代末、タイリャクはコーカンド・ハン国のクルトカ Kurtka 要塞を包囲攻撃するも、毒殺された。

参考文献

Abramzon, “Predmety kul'ta kazakhov, kirgizov i karakalpakov,” *Material'naya kul'tura i khozyaistvo narodov Kavkaza, Srednei Azii i Kazakhstana (Sbornik Muzeya antropologii i etnografii*, t. 34, Leningrad: Izdatel'stvo Nauka, 1978, str. 44-67.

Aitpaeva, Gulnara & Egemberdieva, Aida (eds.), *Sacred Sites of Ysyk-köl: Spiritual Power, Pilgrimage, and Art*, Bishkek: Aigine Cultural Research Center, 2009.

秋山徹「ロシア帝国支配下のクルグズ社会——請願書に映し出された社会的諸関係とその変貌（19 世紀中期から 20 世紀初頭のセミレーチエ州ピシュペク郡を中心に）——」『内陸アジア史研究』第 18 号、2003 年、39-62 頁。

秋山徹「20 世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察——シャブダン・ジャンタイの葬送儀式的分析をてがかりとして——」『内陸アジア史研究』第 24 号、2009 年、83-104 頁。

秋山徹「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の成立——部族指導者「マナプ」の動向を手がかりとして——」『史学雑誌』第 119 編第 8 号、2010 年、1-35 頁。

秋山徹「クルグズ遊牧社会におけるロシア統治の展開：当地の仲介者としてのマナプの位置づけを中心に」『スラヴ研究』No. 58、2011 年、29-59 頁。

佐口透『18-19 世紀 東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館、1963 年。

Web サイト

・ Энциклопедия туриста. Словарь.Б.

<http://www.kyrgyzstantravel.net/glossary/b-r.htm#ex22> (2013 年 2 月 18 日閲覧)

・ time.kg

<http://www.time.kg/index.php?newsid=1602> (2013 年 1 月 30 日閲覧)

近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究 研究成果報告書

2013年3月25日発行

編者 澤田 稔

©東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター

イスラーム地域研究 東京大学拠点

公募研究「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に
関する基礎研究」